

【生薬名】苦参[㊦] *SOPHORAE RADIX*

【起源植物】クララ *Sophora flavescens*



【科名】 マメ科 *Leguminosae*

【別名】 マトリグサ(古名)、クサエンジュ、眩草(目が眩む程苦いので)
地槐、水槐、大槐、驕槐、野槐など

【薬用部分】 根、しばしば周皮を除いたもの

【主成分】 アルカロイド(マトリ)、フラボノイド、フェノール性物質(クマリノ)

【薬性】 気味は苦寒、帰経は心肝小腸大腸胃に属す

【効能】 ●清熱燥湿、祛風殺虫

●湿疹・皮膚化膿症・婦人の陰部癢痒などに主として外用する
苦参30gの煎液で患部を洗浄したり、ピタピタとはたく

●アトピー性皮膚炎の痒みにも加味剤とすると効果がよい

●細菌性の下痢・腸炎、血便、急性胃炎の痙痛、食欲増進に苦参4gまでを煎服
(分3)する

●苦寒の性質が強いので肝腎陰虚でも熱象がなければ使えない

●消炎止瀉剤の原料として利用、1日最大3g、粉末は1.5g

●ストレス性潰瘍発生予防効果が認められている

●乾燥させた全草300g+水5ℓの煮汁は、農作物の殺虫、牛馬の皮膚寄生虫の駆
除に用いる

●マトリンは血管運動中枢を抑制し血圧降下作用を示す

●肝障害抑制、インターフェロン誘起作用が確認されている

【出典】 ●苦参 味苦癰腫、瘡疥、下血、腸風、眉脱、赤癩。(薬性歌)

●味苦寒、主心腹結気、癥瘕積聚、黄疸、溺有余瀝、逐水、除癰腫、補中明目止涙。
(神農本草経中品)

【備考】 ●専ら心経の火を治し、その効用は黄连と類似する。黄连は心臓の火に用い、気
味は清であるが、苦参は心腑小腸の火に用い、気味は渴である(徐洄溪)

●よく清熱、燥湿、涼血、解毒、去風、殺虫の効があり、下痢、腸紅、麻風、瘡
毒、全身の風痒などの症を治す。

【処方例】 ●苦参湯、三物黄芩湯、消風散、当归貝母苦参丸